



ロールモデル編 ①・② について

生徒用ブックレット 6ページ～7ページ

生徒用ブックレット 8ページ～9ページ

ロールモデル編①(土木業界で活躍する女性)解説

大学(学部)の専攻別進学率を見ると、理系に進む女性の比率は男性よりも低くなっています(※1)。研究者として働く人を見ても、女性の比率は低い割合にとどまっているのが現状です(※2)。その要因の一つとして、理系分野は一般的に男性に向いているという固定的な性別意識があり、女性が進学先や就職先として選択しづらくなっていることなどが挙げられます。

ここでは、理系分野の中の、土木業界で活躍する松枝さんを紹介しています。男性の多い職場でも女性が生き生きと働

いていることを伝え、理系分野に興味のある女子生徒が進路を考えるきっかけにしてほしいというねらいがあります。またその中で、仕事と子育てを両立するための働き方、家庭における時間の使い方なども具体的に記述しています。就職・結婚・出産といった高校生が今後直面するであろうライフイベントに対して、主体的に考えることができるような展開が望まれます。

なお、右の指導例では、ロールモデル編②「幼児教育の現場で活躍する男性」(解説は下記)と合わせて、授業を行う場

合の例を示しています。いずれも固定的な性別役割分担意識にとらわれず、生き生きと働いているロールモデルであり、生徒たちが進路選択をするための教材となるはずで

す。なお、女性研究者やその他の理系分野で活躍する女性については、理系女性ロールモデル集のホームページを生徒用ブックレットの裏表紙で紹介しています。

※1 文部科学省「学校基本調査」(平成25年度)

※2 総務省「科学技術研究調査」(平成25年)

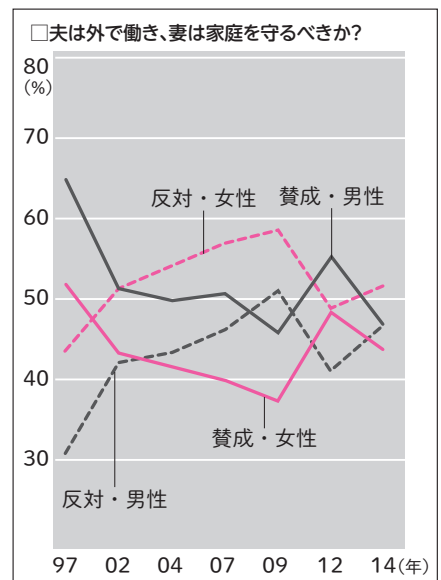
ロールモデル編②(幼児教育の現場で活躍する男性)解説

夫は外で働き、妻は家庭を守る。日本では、まだまだそのような固定的な性別役割分担の意識が存在します(※)。また、進路選択をする際、男子生徒は男性が多数を占める職種、女子生徒は女性が多数を占める職種を思い描きがちになり、将来の選択の幅を狭めてしまうことが懸念されます。また、このような固定的な意識は「性別にかかわらず男女が能力を発揮し、社会や家庭で活躍する」という、男女共同参画社会の推進にとっても、一つの壁となっています。

一方、ここで取り上げる久留島さんのように、自らが本当に希望する職種を選

択し、活躍する人がたくさんいるのも事実です。ここでは、久留島さんが幼稚園というこれまで女性教員が多かった職場で、男性教員として働くことを決意した経緯、また現場での経験や実感を伝えるものとなっています。これらを通じて、生徒が「同性の少ない職場で働くことは、決して難しいことではない」「性別にとらわれることなく、自分が本当にやりたいと思える仕事に就こう」というイメージを持つことを目的としています。

※ 内閣府「男女共同参画社会に関する世論調査」「女性の活躍推進に関する世論調査」(右グラフ)



指導例

特別活動(ホームルーム活動)：進路選択とその後のライフイベントについて考えさせる

- 性別にこだわらない進路選択により、幅広い分野で活躍できることを伝える。
- 育児・家事分担を夫婦が協力することにより、自身の積極的なライフスタイルにつながることをイメージさせる。

全体構想

【職業選択の際の先入観をなくし、多様な進路選択・働き方を知る】

- ロールモデル編①・②を読み、両者の職業選択の理由、両者が実際に仕事をして気づいたことをまとめさせる。(1時間)
- ◎ロールモデル編①・②から、育児・家事を分担することによって見えてきたものを話し合わせる。(1時間)

本時のねらい

ロールモデルから、自由な発想で職業選択をすることが、結果として職場の活性化につながることを、またそれによって充実した人生につながることを理解させる。

本時の展開

生徒全員に生徒用ブックレットを配布している場合を想定

過程	学習活動と内容	指導上の配慮事項(○)と評価(☆)
導入 (3分)	<ul style="list-style-type: none">①働く人の写真を見て印象を述べ合う。②本時のテーマである性別にこだわらない職業選択について考える。	<ul style="list-style-type: none">○一般に女性の職場とされている職場で働く男性、またその逆の場合の写真を見せる。○本時の流れを確認する。○両者とも性別にとらわれることなく、自分の「夢」を実現できたことを確認する。
展開 (37分)	<ul style="list-style-type: none">③松枝さん、久留島さんの事例を読み、両者が現在の進路を選んだ理由をグループに分かれて話し合う。④実際に仕事をして良かったこと・戸惑ったことや、性別にこだわらずに働く2人の生き方が周囲に与えた影響について話し合う。⑤松枝さんの事例から、仕事・育児の両方をこなすことによって見えてきたものを整理する。⑥⑤までで見えてきたものが、男女共同参画社会の実現への一助となることを理解する。	<ul style="list-style-type: none">○両者の言葉、上司の言葉、出産後の働き方(松枝さんの事例)に注目させる。○⑤については、ワークシートを用いてまとめさせる。
まとめ (10分)	<ul style="list-style-type: none">⑦本時の感想文を書く。⑧発表と、教師による総括を行う。	<ul style="list-style-type: none">○多様な意見・感想が出るよう働きかける。☆性別にとらわれない進路選択とその後のライフイベントの経験が、充実した人生と社会の活性化につながることを理解しているかを評価する。

授業の発展

上記指導例をもとにした模擬授業について、18～19ページで紹介している。ここでは個人ワーク中心で授業が構成されているが、適宜グループワークを織り交ぜ、生徒同士の話し合いを促し、視野を広げられるよう導くことを目指して、2時間程度使って実施するということも考えられる。



ロールモデル編② 【コラム】について

生徒用ブックレット 8ページ

解説

コラム記事の横澤さんは、介護と仕事を両立させています。少子高齢化が進む中、将来は自分が家族の介護をする状況になる生徒も少なくないでしょう。「就職」「結婚」などのライフイベントの先にある「介護」についても、高校生のうちから考えてみるのが、ここでの目的です。父親の病気により、キャリアと介護の二者択一を迫られた横澤さんの立場を生徒が自分のこととしてとらえ、「介護の負担により離職せざるを得ない人が多い」という社会問題に対する意識を高める意図もあります。

また、横澤さんが介護を始めた後に再就職した会社での取組についても紹介しています。介護などの家庭の事情を抱えている中でも仕事で力を発揮するためには、仕事と介護の両立を支援する仕組みや制度の整備が重要です。実際、横澤さんの会社以外でも、様々な支援制度が整備され始めています(なお、横澤さんが辞めることになってしまった大手総合社にも介護休業制度はありましたが、申請しても「前例がない」「利益が減ってしまう」という理由で利用することができませんでした)。

また、ここでは詳しく記載していませんが、横澤さんは大手総合社に在籍していたころ、夜遅くまで仕事をしてから遠く離れた実家に帰って介護をしていた時期がありました。そんなギリギリの生

活の中で「キャリアか介護か」の選択を迫られることとなり、介護に専念することを決意しました。退職していた期間は体力的には楽になったものの、社会とのつながりがなくなったことで精神的には不安な状態だったそうです。

介護期間は平均で56.5か月(4年9か月)にもおよぶといわれています(※)。精神的な面はもちろん、経済的な面を考えても、いかに仕事と介護を両立していくかが大きな課題です。

介護とは、家族だけでなく、職場や地域など周囲の様々な人の協力によって、介護される人の生活を設計していくものです。仕事とバランス良く両立させるためには、自分ひとりの工夫だけでなく、社会環境の整備が欠かせないということについて、生徒の理解が深まるようにしましょう。

※ 生命保険文化センター「生命保険に関する全国実態調査」(平成24年度)

グループ討議の手法

今回のような題材を用いて授業をする際に有効な、いろいろなディスカッションの手法があります。

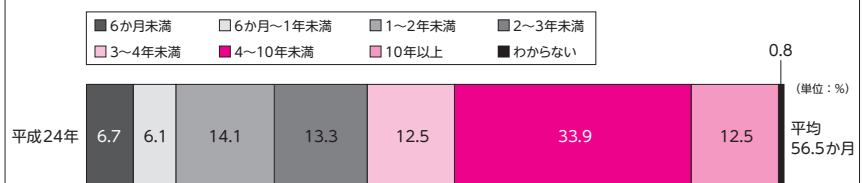
●例1

一つのテーブルにつき、4~5人単位の小グループに分け、設定したテーマについて、まず各テーブルごとに議論する。その後テーブルホスト以外のメンバーを変えながら数回議論を繰り返す。メンバーが安心して発言できるオープンな雰囲気をつくることで、自由な会話から多様な意見や考えを出し合うことができる。

●例2

各人が思いのままにアイデアを出し合うことによって出された意見の一つずつ紙に書き出し、グループごとにまとめて図解する。最初は小さなグループにまとめ、その後関連あるグループを中グループ、大グループと論理的な関連性のある大きなまとまりに分類していく。これにより、テーマに対する解決策やヒントを導く。

□ 介護期間



出典: 生命保険文化センター「生命保険に関する全国実態調査」(平成24年度)

指導例

総合的な学習の時間：社会と自己のかかわりについて主体的に探究させる

- 現代社会の課題や自分自身の課題を考え、より良く問題を解決する資質や能力を育てる。
- 課題を解決するために、情報を収集・活用し、論理的に結論に導く能力を育てる。
- 互いに意見を発表し、他者の意見を受け入れながら、協同する態度を養う。
- 課題について探究したことをわかりやすく表現する能力を育てる。

全体構想

【身近な社会の諸課題と多様な生き方を探究する】

- グループ討議を用いて身近な社会の諸課題と多様な生き方を探究させる。(5時間)
- ◎グループ討議を用いて主体的・協同的・論理的に探究させる。(5時間)
- ◎社会人講話を用いてこれまでの疑問を解決させる。(3時間)
- ◎レポート作成によりこれまでの学習を整理・表現させる。(2時間)

本時のねらい

身近な諸問題「キャリアと家庭のバランス」について、グループ討議により自分たちの考えをまとめて発表する中で、人が生涯の中で様々な役割を果たすことを理解させる。また、自らの役割の価値を見出し、自己の能力・適性を生かそうとする態度を身につけさせる。

本時の展開

生徒全員に生徒用ブックレットを配布している場合を想定

過程	学習活動と内容	指導上の配慮事項(○)と評価(☆)
導入 (3分)	<ul style="list-style-type: none"> ①本時のテーマ「キャリアと家庭のバランス」を確認する。 ②グループ討議の流れについて確認する(前時までの既習事項)。 	<ul style="list-style-type: none"> ○前時で活用した介護に取り組む横澤さんの事例(生徒用ブックレット8ページ)の内容を確認する。 ○本時の流れを確認する。 ○グループ編成に配慮する。
展開 (40分)	<ul style="list-style-type: none"> ③各自の意見を紹介する。 ④各自の意見をテーブルクロス(模造紙)に構造化する。 ⑤席替え(グループ再編成)をする。 ⑥直前グループの意見を紹介(テーブルホスト)する。 ⑦各自の意見をテーブルクロス(模造紙)に追加して構造化する。 ⑧グループの仮結論について発表する。テーブルクロス(模造紙)に構造化された双方の立場の意見を象徴的なキーワードを使って発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○多様な視点から意見が出るように、双方の立場から考えるように指示する。 ○テーブルホスト(席替えをしない生徒1名)を確認する。 ○テーブルクロス(模造紙)上の構造化について確認(既習事項)。 ○あくまでも仮結論であることを指示する。 ○キーワードを用いてすべてのグループの話し合いの内容を共有化させる。
まとめ (7分)	<ul style="list-style-type: none"> ⑨未来ノート(総合的な学習の時間ノート)に本時の気づきを記録する。 ⑩教師による総括を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○話し合いによって得られた成果が今後の生活や生き方に結びつくよう、横澤さんの事例を活用し総括する。 ☆人が生涯の中で様々な役割を果たすことを理解し、また、自らの役割の価値を見出し、自己の能力・適性を生かそうとする態度が身についているかを評価する。

「仕事が好きになってしまったから、辞職してしまわれることは考えられなかった。」

「子供と向き合う時間が、管理職として働く自分の成長にもつながった。」

「女性の活躍」は日本を元気にする!

「自分が夢中になれることに純粋にホムホムを注いでほしい。」

ロールモデル編 ③

について

生徒用ブックレット 10ページ～11ページ

解説

第1子を出産した後、仕事を辞めてしまう女性は約6割にもなります(※1)。その主な理由の一つは、仕事と子育ての両立が難しいという職場環境にあります(※2)。また、子育てのためにいったん退職してしまうと、その後再就職したとしても、非正規雇用での就業となることが多いのが現状です(※3)。

その一方で、ここで取り上げている今川さんのように、子育てと両立しながら仕事を続け、キャリアを積んでいる女性も多くいます。ここでは、働く女性の「仕事への姿勢」「仕事と子育てを両立するための工夫」「子供への思い」などを紹介しています。これらを通じて、女子生徒が、「出産や子育ては、キャリアの妨げではなく、両立できるもの」というイメージを持つことをねらいとしています。

女性の活躍を推進することは、社会にとって必要不可欠なことでもあります。その理由の一つが少子高齢化です。2020年には高齢化率が30%を超え、将来はどの国も経験したことのない超高齢社会になると予想されている日本において、男性だけではなく、女性の労働力も非常に重要なものとなります。しかし、今川さんのように管理職として社会で活躍する女性は、現状では全体の1割強程度にとどまっています(※4)。今後、この割合を増やしていくためには、どうすればよいのでしょうか。この問題に対して、

政府は平成11年の男女共同参画基本法の制定後、平成12年から「男女共同参画基本計画」に基づき、男女共同参画社会の実現に向けて様々な施策を進めているところです。

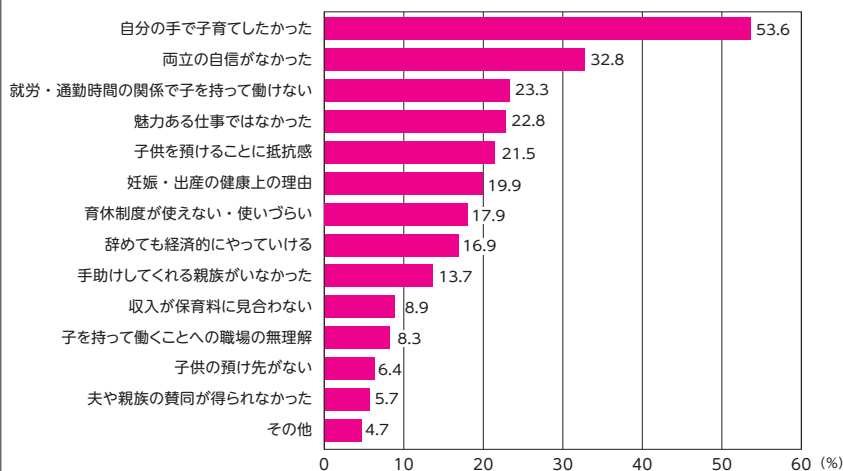
欧米では、女性の管理職が30～40%と、日本よりも高い割合となっています(※5)。これは、女性の地位を優遇する「ポジティブ・アクション」が功を奏していることでもあります。欧米では男性が家事や育児に費やす時間が長く(※6)、家庭における女性の負担を減らすことができた結果、女性が活躍しやすい環境が整っているのです。実際、今川さんが育児と両立しながら管理職にまでキャリアアップできた背景には、職場の制度(「時短勤務」)・理解のほかに、

配偶者の協力がありました。

家庭は男女が協力して築くものです。本学習により、「男性だから、女性だから」といった偏りのない視点を持ち、家事や子育てに対する理解を深めたいものです。

- ※1 国立社会保障・人口問題研究所「第14回出生動向基本調査(夫婦調査)」(平成22年)
- ※2 内閣府「男女共同参画白書」(平成25年版)
- ※3 厚生労働省「働く女性の実情」(平成23年版)
- ※4 厚生労働省「賃金構造基本統計調査」(平成25年)
- ※5・6 内閣府「男女共同参画白書」(平成25年版)

□ 出産前に仕事を辞めた理由(複数回答)



出典：独立行政法人労働政策研究・研修機構「育児休業制度に関する調査研究報告書」(2003年)

指導例

家庭基礎：生涯の生活設計——男女で協力して家庭を築くこと、ワーク・ライフ・バランスを図るための条件整備について学習させる

- 仕事と子育てについて、男女で協力して家庭を築くことの重要性について考えさせる。
- ワーク・ライフ・バランスに取り組もうとする意欲を育てる。

全体構想

【男女で協力して家庭を築くこと、女性が活躍できる社会づくりの重要性を理解する】

- ◎求められる親の役割と子育て支援の在り方について考えさせる。(1時間)
- 出産・子育てと職業キャリアとの両立が可能であることを理解させる。(1時間)
- ◎女性の活躍が社会にとって重要な意味を持つこと、政府が女性の活躍を重点目標としていることなどについて理解させる。(2時間)

本時のねらい

育児をしながら管理職として活躍する女性の生き方を通して、性別役割分担意識にとらわれずに生活設計をする意義を考えさせるとともに、ワーク・ライフ・バランスの取組の一例を伝え、女性の活躍を推進することが、これからの社会にとって大きなメリットになることへの理解を促す。

本時の展開

生徒全員に生徒用ブックレットを配布している場合を想定

過程	学習活動と内容	指導上の配慮事項(○)と評価(☆)
導入 (10分)	①今川さんの事例を読む。	○資料を読ませ、生徒に感想を発表させる。
展開 (35分)	②「ターニングポイント」を参考に、今川さんのライフコースを表にまとめる。 ③「ワーク・ライフ・バランス」の意味を知る。 ④我が国の子育て支援制度について、教科書等で理解する。 ⑤コラム「『女性の活躍』は日本を元気にする!」を読み、今後の社会の課題について考える。	○生徒が答えやすいようにワークシートを準備してもよい。 ○今川さんの成功の理由については、付箋紙などを使って自由に答えさせ、それらを分類しながらまとめ、女性の生き方、パートナーの男性の考え方、会社(社会)の在り方などについて考えさせる。
まとめ (5分)	⑥仕事と子育ては両立できるということ、社会にとって女性の活躍が重要な意味を持つことを理解する。	○「女だから」「男だから」という偏りのない視点を持つことの重要性を理解させる。 ☆女性の活躍を推進することが社会にとって重要であることを理解しているか、性別役割分担意識にとらわれずに自分自身の生活設計につなげていくことについて考えているかを評価する。

授業の発展

政府は、「社会のあらゆる分野において、2020年までに、指導的地位に女性が占める割合が少なくとも30%程度になるよう期待する」という目標を立てている。今川さんのような企業等の課長相当職以上の指導的地位に立つ女性を増やす政策の意義や課題について、話し合うことも考えられる。

育児休業を取り、育児と地域活動に取り組む男性。

育児は、人生で幸せな体験。男性が育児休業を取ることをもっと当たり前にしたい。

橘 啓吾

「育児を取ったことで、自分の世界がどんと広がっていった。」

橘 啓吾 先生は、株式会社「橘 啓吾 先生事務所」を主宰し、子育て支援や企業研修、講演活動などを行っています。また、子育て支援の専門家として、子育て支援センターや保育園、幼稚園などで活動しています。

橘 啓吾 先生は、子育て支援の専門家として、子育て支援センターや保育園、幼稚園などで活動しています。また、子育て支援の専門家として、子育て支援センターや保育園、幼稚園などで活動しています。

橘 啓吾 先生は、子育て支援の専門家として、子育て支援センターや保育園、幼稚園などで活動しています。また、子育て支援の専門家として、子育て支援センターや保育園、幼稚園などで活動しています。

ロールモデル編 ④

について

生徒用ブックレット 12ページ～13ページ

解説

夫婦の家事・育児時間の調査結果によると、共働き世帯であっても、圧倒的に妻の負担が大きくなっています(※1)。「男性は仕事、女性は家庭」という固定的な性別役割分担意識が、社会や職場に残っていることが、その背景にあります(※2)。また、男性が仕事より家庭を優先しようと思っても、会社からの理解が得られないといったことも少なくありません。結果的に、育児休業を取得する男性の割合は、わずか3.4パーセントにとどまる(※3)など、「男性の家庭進出」は進んでいないのが現状です。

そのような現状にあって、“職場で共に働く部下・スタッフのワーク・ライフ・バランスを考え、キャリアと人生を応援しながら、組織の業績も上げ、さらに自分自身も仕事と私生活を楽しむことができる上司(経営者・管理職)”が、今必要とされているそうです。男性も仕事だけでなく、家庭や地域での活躍が求められるこれからの時代。組織のリーダーには、男性であっても気兼ねなく育児が取れるなど、部下が仕事以外の活動にも積極的になれるような支援や環境づくりが求められています。「男性の家庭進出」は、「女性の社会進出」にもつながります。女性が仕事を辞める理由の中で最も多いのが、「出産」です(※4)。今後、家事・育児に積極的に取り組む「イクメン」が増え、女性の育児負担を減らすことができれば、「女

性の社会進出」を進めることにもつながっていきと考えられています。また、父親が家事・育児に協力的な家庭は2人目以降の子供が生まれやすいというデータもあります(※5)。

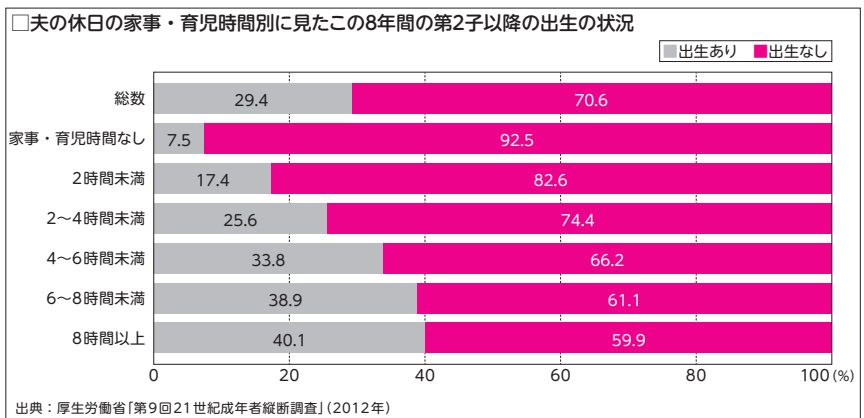
ここでは、このように社会から強く求められている「イクメン」である橘さんを紹介しています。「子供の笑顔」という報酬、会社とは違った「地域とのつながり」、「妻からの感謝」など、子育てに参画することで得られるものが、人生をより豊かにしてくれることを伝えています。子供に深い愛情を注ぎ、養護することは、男性・女性にかかわらず大人として当然の役割であるということを伝えます。

共働き家庭が多くなった今(※6)、「男女が共に働き、育てる」家庭も多くなりつつあります。「一家の大黒柱として稼ぐ」という父親像だけでなく「イクメン」という新しい父親像が生まれていることを、

生徒たちに実感させたいところです。

またコラム記事では、男性の子育てや地域活動への参画がより良い社会につながるということについても紹介しています。より良い社会をつくっていくのは、これから社会に出る自分たちであることを、生徒に伝えたいものです。

- ※1 総務省「社会生活基本調査」(平成23年)
- ※2 内閣府「男女共同参画社会に関する世論調査」(平成24年)
- ※3 厚生労働省「雇用均等基本調査」(平成25年)
- ※4 国立社会保障・人口問題研究所「第14回出生動向基本調査(夫婦調査)」(平成22年)
- ※5 厚生労働省「第9回21世紀成年者縦断調査」(平成24年)
- ※6 総務省「労働力調査(基本集計)(年平均)」(平成25年)



指導例

家庭総合：親の役割と子育て支援——保育分野における男女の協力、地域との連携について考察させる

- 現代社会において、男性が積極的に家庭生活にかかわり、女性の育児負担を減らすことの必要性を具体的に理解させる。

全体構想

【男性の育児参画を進めることの意義を理解する】

- ◎我が国の家庭生活を取り巻く現状と課題について、新聞、雑誌、インターネット等で調べ、感じたことをまとめさせる。(1時間)
- 求められる親の役割と子育て支援の在り方について考えさせる。(2時間)
- ◎自分がどのように生きていきたいか、働き方と子育てを中心に具体的に生活設計をさせる。(2時間)

本時のねらい

育児休業を取得した男性の事例から、「イクメン」としての生き方には、男性の生き方として大きなメリットがあることを理解するとともに、男性が積極的に家庭生活にかかわることで、女性の育児負担が減少し、そのことがより良い社会実現につながることを理解させる。

本時の展開

生徒全員に生徒用ブックレットを配布している場合を想定

過程	学習活動と内容	指導上の配慮事項(○)と評価(☆)
導入 (10分)	①橘さんの事例を読む。	○資料を読ませ、生徒に感想を発表させる。
展開 (30分)	②橘さんの生き方から学んだこと、気づいたことを考える。 ③同じ意見のメンバー同士でグループに分かれ、それぞれの理由と、夫・妻・子供のメリットとデメリットを話し合い、発表する。 ④グループ間で意見交換をする。 ⑤男性の育児休業取得率の低さの原因を考え、高くするためにできることを考える。 ⑥女性の社会進出には、男性の家庭参画が不可欠であることを理解する。	○挙手により人数を確認し、1グループ10人程度になるように班を構成する。班内の司会者や記録係を決め、グループ内の話し合いがスムーズに行えるよう配慮する。 ○感想の異なる人の考えや思いに耳を傾け、視野を広げるよう促し、意見を異にする人を認められる態度を育てる。 ○性別役割分担意識にとらわれていないか、気づかせる。 ○長年の習慣は簡単には変わらない部分もあるが、性別にとられない意思決定をすることが、一人ひとりが尊重される社会につながることを理解させる。
まとめ (10分)	⑦橘さんのメッセージ(男性が育児休業を取ることをもっと当たり前にしたい)について、感想をまとめる。	○橘さんの現在の活動に触れ、自分自身の幸せのためだけでなく、社会をより良くするための活動であることについても理解させる。 ☆男性が育児休業を取得するなど、積極的に家庭生活にかかわることで、男女が協力して生活を営むことができることについて理解しているかを評価する。

用語解説：育児休業

育児・介護休業法では、「子が1歳に達するまでの間(子が1歳を超えても休業が必要と認められる一定の場合には、子が1歳6か月に達するまで)、育児休業をすることができる」と定められている。会社に制度がなくても、要件を満たした社員が申し出た場合、会社はこれを拒否することはできない。なお、企業によっては、「子供が3歳に達するまで取得できる」など、法律を上回る内容の制度を定めていることもある。